

『教育と生活の論理：子どもの生活力とおとなの教育力』 南里悦史 編著

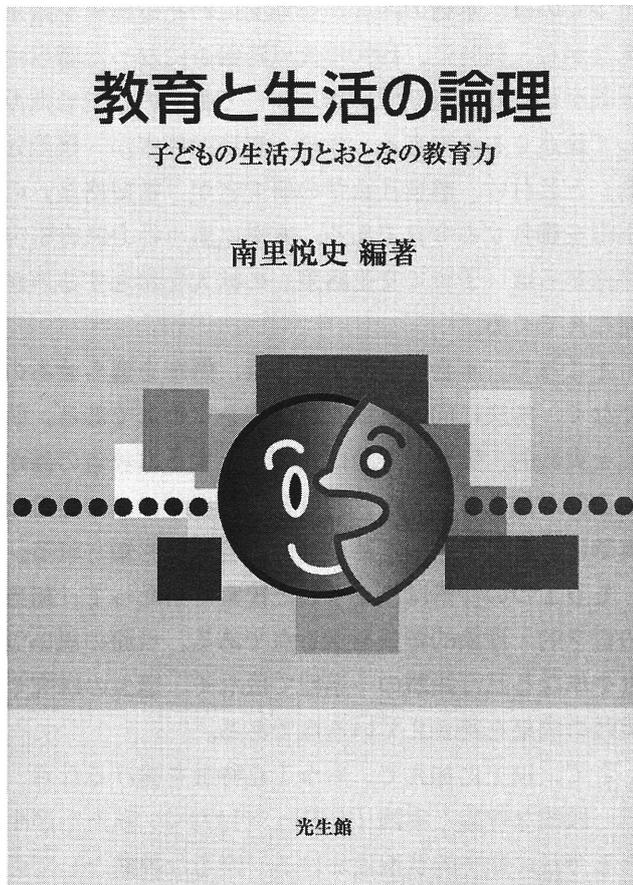
山岸，治男
大分大学教育福祉科学部

<https://doi.org/10.15017/19979>

出版情報：生活体験学習研究. 9, pp.45-46, 2009-01. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

『教育と生活の論理 —子どもの生活力とおとなの教育力—』

南里悦史 編著



「利」価値を追求する文明と「自然」の理を壊して進む生活様式の変化は、大人に快樂をもたらす一方、子どもの発達に致命的な打撃を与えている。人類の知的・技術的所産は、決定的破壊事件が無い限り、伝達システムを整えれば次世代に比較的容易に受け渡すことができる。だが、新生児が自立した成人になる「養育・保育・教育」の過程は、システム整備に加えて具体的な実生活を本人自身が体験すること無しには容易に遂げられないものである。

本書は、この自明の理をあらためて啓発し、子どもが実生活を体験できる社会のあり方を探究するものである。そこには、単に子どもの発達過程を解説するに

留まらず、大人社会の現況が続く場合、子どもの発達にどんな阻害状況が生まれるか、子どもの生活世界にどんな危機が発生するか、ひいては近未来社会にどんな危機が起こるかを警告する木鐸の意味も横たわっている。この木鐸に傾聴すると、子ども（未来の大人・次世代）の発達環境としての現代社会を、今、大人として過ごす私たちが、どのように評価・反省（批判）し、それをどんなベクトルに変えていくべきかを考えるヒントが聞こえてくる。

「警鐘をならし、提案する」形式は、「はじめに」から最終の第7章まで一貫する。全体を貫く視点は、教育界への市場原理の導入、そこに発生するサービス化の波と子どもの生活体験機会の変容である。

「第1章 子どもの教育を育む地域の生活と共同性の再構築」（東京農工大学・南里悦史担当）は、ガストン・ヴィオーの、「論理的知識」と「実務的知能」の相互作用を媒介する「体験」と「言語」に関する理論を引用し、教育・生活・地域の関係を探る。この過程で、宮原の「形成と教育」の意味を再考し、学力テストの結果に動揺して学校中心主義に回帰する今日の教育に警鐘を鳴らす。そこから地域主権と教育自治が提案される。

「第2章 子どもの教育の階層化と自律的協働」（九州大学大学院・相戸晴子担当）では、新自由主義下に進行する経済格差の中で、子育てにも階層差が現れている事実を踏まえ、親同士の学び合いや育ち合いが大切なことを呼びかける。陥りやすい孤立や狭い範囲に固定化した人間関係を、子どもを介して多様で開放的な関係に変えることができる学び場の構築である。学習を通じた保護者や地域の協働は里山保育などの実践にも結実する。

「第3章 少子・格差社会における生活の自立化と教育力」（佐賀短期大学・永田誠担当）は前の2つの章を具体的な調査結果を示して受け継ぐ。子育ての「外部化」などの実態を数値で示し、制度的・文化的趨勢に飲み込まれてしまわない保護者の主体性形成が、子どもの発達環境として必要なことを提案する。特に、生活実態の把握について、かける時間など数量に

る認識のみでなく、質的側面の実態把握が重要なことを指摘する。

「第4章 地域で『生きる』力を育む青年の学習」(熊本大学・山城千秋担当)は、「自由社会」でアイデンティティを見失いがちな青年の実態を見据え、地域に社会的役割を見出して積極的にアイデンティティを形成する可能性がある事例を検証する。人は無意識的に社会が設えた「学校経由の就職」ルートなどに乗る。不況やアイデンティティ喪失状態の下で初めて、「職とは何か」など自己の主体性確立を自覚し探究するのである。

「第5章 ボランティア・体験活動の組織化と学びの場の再構成」(埼玉大学・岡幸江担当)は、「関係論」に立脚した学びの場を追求する斬新な内容である。ボランティアや体験活動がどんな文脈で政策化され、組織化したか、主体的な市民を形成する学びの場としてどんな再編可能性があるか、日本の現状を踏まえて論究する。活動をする・活動を受ける双方に「対等な互酬関係」を実現することが、関係への参加のポイントである。

「第6章 教育のガバナンスと発達『自由』空間の再生」(東北大学・石井山竜平担当)は、「公共」概念の再考を促す刺激を与える。従来の公共(行政)が諸場面から後退しがちな今、新しい公共が求められている。そこに従来の行政の性質を超えるどんな新たな性質を導入するかが問われるが、回答は市民自身の学習のありように掛かる。子育て支援施設長I氏の試みを事例に、「市民的公共性」に向き合う行政の創造が提案される。

「第7章 環境学習と共生教育の創造」(別府大学・長尾秀吉担当)は、「感じること」の教育的意味を問い、カーソンを引用しながら体験に関する哲学的考察を展開する。「科学的な知と生活の知」、「貨幣関係の自然」、

「食と自然」等について論究した後、人が生活者として環境をどう認識するかに触れる。具体的事例にあげた柳川のクリーク再生は市民が学習を通して「生活の知」を環境との「共生文化」に結実した典型である。

本書に収められた全7章の概要を記した。読了して気づくのは、本書の内容が長期間にわたる調査を踏まえながら、同時に、1990年代以降顕著になった新自由主義が教育界に及ぼす影響について最新の状況を把握して論述する点である。政治・経済関係者が「格差社会」と名付け、感情社会学の研究者が「希望格差」の出現を警告する今日である。本書に集う社会教育研究集団からは「子育て文化格差」の拡大を懸念する声が聞こえてくる。

ところで、本書の特徴の1つは、懸念を煽らせるのではなく、解決に向けた様々な提案をする点である。研究を実践的、実務的課題に繋ごうとする編著者の確かな姿勢が伺える。また、若手各執筆者が、この姿勢に真摯に応えようとした跡が論述の随所に感知される。

もう1つの特徴は、こうした提案に当たって、相当の哲学的・理論的背景を探る点である。当面の思いつきや単なる試行錯誤の一過程ではなく、過去の研究や実践の成果を踏まえている点である。

さて、以上に加えて、もう1点特徴を掲げるなら、「一般的な理論と実践(実際)」ではなく、私たちが生きる今日の歴史的状況における「緊急な課題としての子どもの教育」を認識する点である。評者の認識に引き寄せるなら、子どもの発達環境として、添加物混入ファースト食品にイエローカードが出始めたのが1970年頃である。以降、カードは遊びや仲間集団、使用道具や器具、自然や人との関係などに次々と拡散し、多くはレッドカードに切り替えられてきた。にもかかわらず、なお本格的な対策を講じない社会に対する知的な「抗い」ともいえる一面が鮮明に映るところである。

[光生館、2008年、2200円(税別)]
(大分大学 山岸 治男)